

（４）本市の都市づくりの基本理念・将来都市像の実現に必要な都市構造の考え方

将来都市像の前提として定めた４つの基本理念に沿って、湖西市が目指すべき将来都市構造の構築に必要な考え方を整理します。

① 「職住近接」による持続可能な集約・連携型都市の構築

の実現に必要な都市構造の考え方

●市街地における都市の拠点の形成・充実と拠点間の連携

市役所や中心市街地を含む鷺津市街地には、本市の中核機能を担う都市拠点を、また、東西の玄関口である新居市街地及び新所原市街地には、地域の生活や観光交流を支える地域拠点を形成し、それぞれの拠点の役割に応じて居住や都市機能の集積を図り、地域の機能や魅力を高めます。これらの拠点間を、また市街地周辺部の産業拠点との間を、道路・公共交通ネットワークで連携する機能的な都市構造とします。

●既存集落地における地域づくりと拠点間の連携

北部の湖岸周辺や南部の旧東海道沿道に形成されている既存集落地では、周辺に広がる良好な自然景観や田園景観と調和した個性ある地域づくりを進めながら、日常的な生活利便性の維持・向上を図るため、身近なエリアに必要な機能を確保するなど、くらし環境を整えるとともに、生活拠点として位置づけ、都市拠点・地域拠点・産業拠点とを道路・公共交通ネットワークで連携する機能的な都市構造とします。

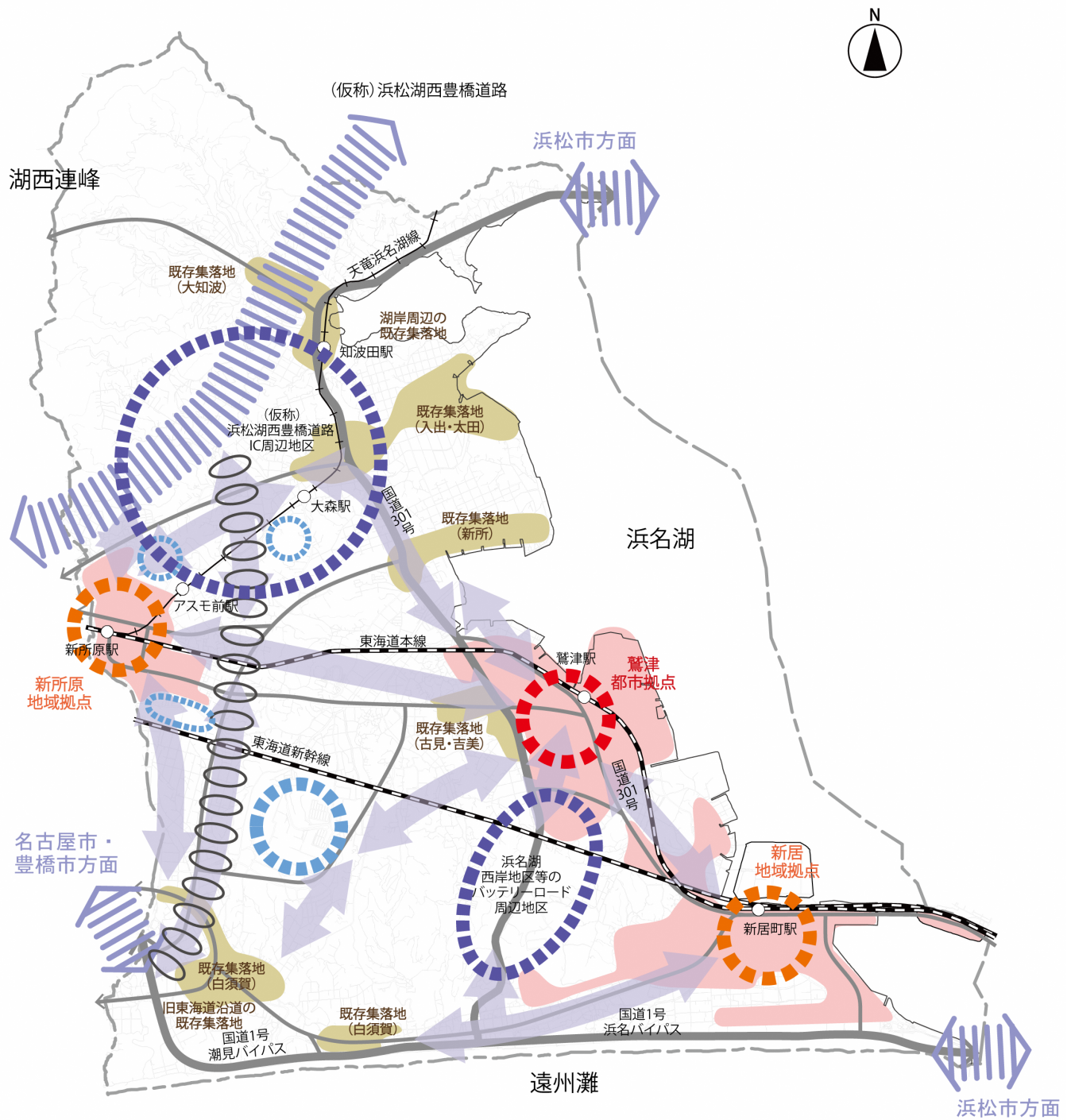


図. 「職住近接」による持続可能な集約・連携型都市の実現に必要な都市構造の考え方

②「産業の集積と連携により新たな価値と活力を創造する都市」

の実現に必要な都市構造の考え方

●産業拠点の維持・形成と効率的な道路交通体系の実現

本市には、輸送用機械器具製造業や電気機械器具製造業を始めとする工業の集積地があります。また、浜名湖西岸地区では、都市基盤の整備による新たな産業用地が創出され、高い付加価値を生み出す成長ものづくり分野の生産機能や研究開発機能の立地が進みつつあります。

本市では、既存の工業集積地を産業拠点として位置付け、社会情勢や技術革新に合わせて機能更新を図っていくとともに、さらなる産業活力の向上のため、浜名湖西岸地区等のバッテリーロード^{注)}周辺地区を新産業拠点として位置付け、拠点機能の充実を図るとともに、物流の迅速化と市街地における円滑な交通の実現に寄与する都市構造とします。

さらに、インターチェンジによる高速交通体系との結節点を最大限都市活力の向上に活かすため、(仮称)浜松湖西豊橋道路ⅠC周辺地区についても、新産業拠点として位置付けをします。

注) バッテリーロード：(都)大倉戸茶屋松線のうち、国道1号浜名バイパス大倉戸ⅠCから(都)谷上大沢線との交差点までの通称

●農業生産環境の維持、農工商連携の促進

農業就業者の高齢化や後継者不足により耕作放棄地が増加し、土地利用上及び景観形成上の課題が生じています。

本市では、農地への集約化や意欲のある就農希望者への農地の提供等により効率的な農業生産環境を整えつつ、農工商連携を促進し地域の稼ぐ力を高める取組を進めます。

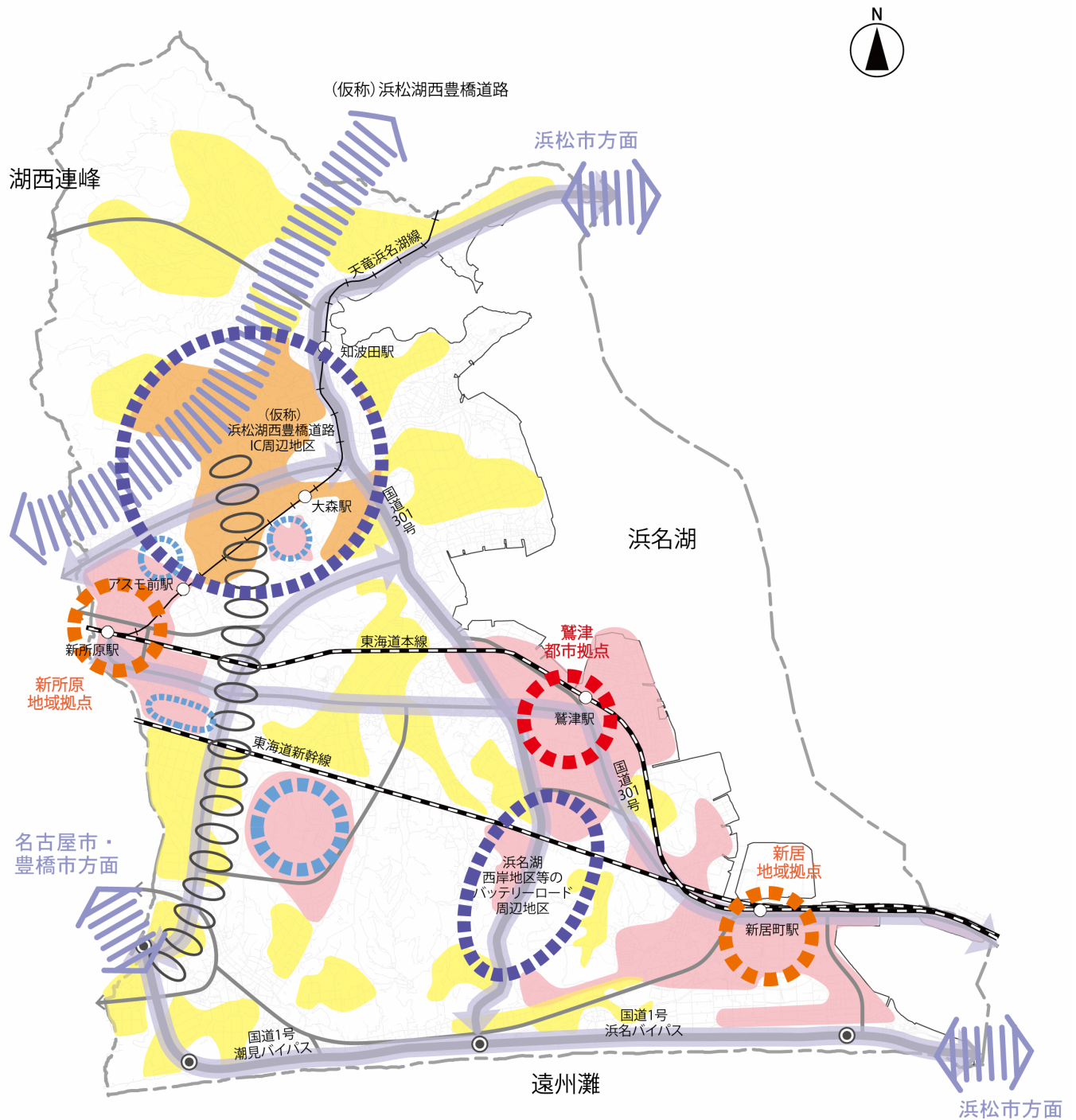
今後、整備が予定されている(仮称)浜松湖西豊橋道路ⅠC周辺地区では、農地の集約化を図るとともに、遊休地を活用して農工商が連携した土地利用を図ることができる仕組みを検討します。

●生活交流や観光交流を支える魅力的な商業空間の形成

鷲津都市拠点では、多くの市民が生活し交流する中心市街地として、商業・業務機能をさらに集積・高度化することにより、賑わいのある魅力的な商業空間を形成します。

新所原地域拠点では、地域住民の交流や、湖西連峰等への観光客との交流を意識した、賑わいのある魅力的な商業空間を形成します。

新居地域拠点では、地域住民の交流や、新居関所や寺道、小松楼等への観光客との交流を意識し、新弁天地区や新居弁天地区と連携を図ることにより、賑わいのある魅力的な商業空間を形成します。



凡 例					
	農業生産環境の維持等		産業連携エリア		広域道路
	市街地エリア		産業拠点		主要道路
	都市拠点		新産業拠点		構想道路
	地域拠点		都市間連携軸		鉄道
					行政界
					インターチェンジ

図. 「産業の集積と連携により新たな価値と活力を創造する都市」の実現に必要な都市構造の考え方

③「災害の最小化と迅速な復興による安心して暮らせる都市」

の実現に必要な都市構造の考え方

●自然災害に備えた市街地・生活拠点の形成

自然災害から市民の生命・財産を守る市街地・生活拠点の形成を図るため、地震・津波災害に対しては、建物等の倒壊を防ぐための耐震化の促進、延焼火災の防止や災害応急活動の場となる空地の確保、最大規模の津波の被害を防止・軽減するためのレベル2津波対応防潮堤の検討、津波から避難するための命山や津波避難タワー等の津波避難施設や避難路整備の更なる推進等のハード整備により都市構造の強化を図ります。

豪雨災害に対しても、河川氾濫に対する流域治水の考え方を踏まえ、流域のあらゆる関係者で水災害対策を実施するなど、ハード・ソフトの対策を効果的に進めることができる都市構造とします。

●応急活動や迅速な復旧・復興を支えるネットワークの構築

災害直後の避難、救出をはじめ、物資供給等の応急活動を支える緊急輸送路のリダンダンシーを確保するため、（仮称）浜松湖西豊橋道路と連絡する道路ネットワークの構築を図ります。また、緊急輸送路網と一体となって応急活動や迅速な復旧・復興を支える拠点機能が効果的に発揮される都市構造とします。

●災害リスクの軽減に向けた市街地・生活拠点の形成

災害が発生したとしても被害を最小化するため、それぞれの区域の災害リスク、警戒避難体制の整備状況、災害を防止し、又は軽減するための施設の整備状況や整備見込み等を総合的に勘案し、災害リスクの高い区域から低い区域への居住や各種都市機能を誘導します。

また、たとえ被災したとしても迅速な復興が図られるよう、基礎的データの収集、復興体制、復興手順、復興まちづくりの目標、実施方針の検討等の復興事前準備を進めるなど、事前復興まちづくり計画の検討・策定に取り組めます。



図. 「災害の最小化と迅速な復興による安心して暮らせる都市」の実現に必要な都市構造の考え方

④「豊かな自然や歴史などの地域資源を活用した都市」

の実現に必要な都市構造の考え方

●緑・水辺の保全と活用

湖西連峰や市内に連なる大小の丘陵地、低地を流れる河川や浜名湖岸、遠州灘海岸沿いの緑地は、本市の水と緑による自然環境の骨格を形成しています。

こうした緑地や水辺空間は、グリーンインフラとして市民に安らぎや潤いをもたらし、レクリエーションの場を提供し、また、二酸化炭素の吸収という面では、カーボンニュートラルに貢献する等、多面的機能を発揮しています。

本市では、これらの骨格的な自然環境や良好な景観を、貴重な資源として保全するとともに、賑わいの創出のために活用する都市構造とします。

湖西連峰から連なる樹林地や水辺沿いの緑地を保全する一方、海洋性レクリエーションが盛んな新居弁天地区や松見ヶ浦沿岸に観光拠点を配置します。

●歴史資源の保全と活用

本市は、東海道の要所として古くからの人の往来があり発展してきました。現在も当時の趣を残している歴史資源として、鎌倉時代に盛えた応賀寺、平安時代に栄えた寺院の跡が残る大知波峠廃寺跡、南北朝時代から信仰の拠点となっている本興寺などの神社仏閣が残されています。

また、江戸時代には東海道五十三次の宿場である新居宿や白須賀宿が設けられ、特に新居宿には、日本で唯一現存する関所建物「新居関跡」があり、国の特別史跡に指定されています。

本市では、これらの多様な歴史資源を本市に住む人の文化・くらしの支柱として後世に残すとともに、本市を訪れる人との交流を促進する観光資源として活用するための都市構造を構築します。歴史・文化的資源を有し、まち歩きにより宿場町全体を体験できる「新居関跡」周辺に観光拠点を配置します。

●湖西ならではの良好な景観の形成

浜名湖の水辺、湖越しに眺める湖岸線、背景となる湖西連峰の山並みが、本市の典型的な景観構造を構成しています。また、旧東海道は歴史を感じることが出来る本市を代表する景観軸となっています。さらに、既存の集落地周辺は良好な農村景観が広がる区域を形成しています。こうした湖西ならではの景観構造を基盤として、良好な景観形成を進めていきます。



凡 例					
	緑の保全と活用を図るゾーン		市外から市内への重要なアクセスルート		緑
	水辺の保全と活用を図るゾーン		市内の主要なアクセスルート		水辺
	歴史資源の保全と活用を図るゾーン		ゾーン内回遊イメージ		主な水辺資源
					主な歴史資源
					広域道路
					主要道路
					鉄道
					行政界

図. 「豊かな自然や歴史などの地域資源を活用した都市」の実現に必要な都市構造の考え方

（５）湖西市が目指す将来都市構造

これまでの考え方を総合的に踏まえ、本市では、湖西連峰や浜名湖等の豊かな自然環境を保全しながら、基幹的な公共交通である東海道本線沿線に都市機能を集約する拠点を配置して機能強化を図るとともに、鉄道や地域公共交通などにより、拠点間、拠点と周辺都市、拠点と既存集落地との連携を促進する「集約・連携型の都市構造」を目指します。

湖西市が目指す将来都市構造

集約・連携型の都市構造

「集約・連携型の都市構造」を目指す上で、都市機能を集約する拠点は、東海道本線の鷺津駅、新居町駅及び新所原駅の各駅を中心とする市街地に配置します。

このうち、鷺津駅を中心とする鷺津市街地は「都市拠点」として位置付け、市民や来訪者など、あらゆる人が集まり交流する本市の中心地として、医療・福祉、子育て・教育、商業、文化、行政などの都市機能の集約を図ります。

また、新居町駅を中心とする新居市街地や新所原駅を中心とする新所原市街地は「地域拠点」として位置付け、地域における生活・交流の中心地として、居住機能のほか、生活に身近な商業・業務機能、自然や歴史などの地域資源を活かした観光機能などの充実を図ります。

地域コミュニティ・地域活力の維持を図る「生活拠点」は、合併前の旧町村の中心地を含む指定大規模既存集落地に配置します。

「産業拠点」は、既存の工業地である東海道新幹線南側の笠子地区の一団の工業地、新所原市街地の北部及び南部に位置する工業地、天竜浜名湖線大森駅に近接する工業地を「産業拠点」と位置付けます。また、浜名湖西岸地区等のバッテリーロード周辺地区及び市北部の（仮称）浜松湖西豊橋道路ＩＣ周辺地区を「新産業拠点」として位置付け、本市の活力を生み出す源とします。

誰もが、いつでも都市内を安全・快適に移動でき、「都市拠点」や「地域拠点」及び「生活拠点」におけるサービスを享受し、また、「産業拠点」に快適に移動でき「職住近接」を実感できるよう「都市内職住近接連携軸」を形成します。また、隣接する都市圏との連携を強化し、産業活動の効率化や観光等により地域の活性化を促す「都市間連携軸」を形成し、「都市内職住近接連携軸」及び「都市間連携軸」を有機的に連携させ、地域公共交通及び自動車交通のネットワークの充実・強化を図ります。

「都市間連携軸」は、国道１号バイパス、国道３０１号及び今後整備が予定されている（仮称）浜松湖西豊橋道路がその機能を担います。また、「都市内職住近接連携軸」は、東海道本線、天竜浜名湖線、国道４２号、国道３０１号、主要地方道豊橋湖西線などがその機能を担います。

〈将来都市構造図〉

